第三篇　大聖、晩年の光輪　その一
廿一、当山は功徳聚
二十一日　四条金吾殿御返事（定遺　１８００）

倩事の情を案ずるに、今は我が身に過あらじ。或は命に及ばんとし、弘長には伊豆国、文永には佐渡の島、諫暁再三に及べば留難重畳せり。仏法中怨の誡責をも身には、はや免れぬらん。然るに今山林に世を遁れ、道を進んと思しに、人々の語様々なりしかども、旁存ずる旨ありしに依て、当国当山に入て已に七年の春秋を送る。又、身の智分をば且く置ぬ。法華経の方人として難を忍び、疵を蒙る事は漢土の天台大師にも越、日域の伝教大師にも勝たり。是は時の然らしむる故なり。我身法華経の行者ならば、霊山の教主釈迦・宝浄世界の多宝如来・十方分身の諸仏・本化の大士・迹化の大菩薩・梵・釈・龍神・十羅刹女も、定て此砌におはしますらん。水あれば魚すむ、林あれば鳥来る、蓬莱山には玉多く、摩黎山には栴檀生ず。麗水の山には金あり。今此所も此如。仏菩薩の住給功徳聚之砌也。多くの月日を送り、読誦し奉る所の法華経の功徳は虚空にも余りぬべし。

（弘安三年十月八

日)